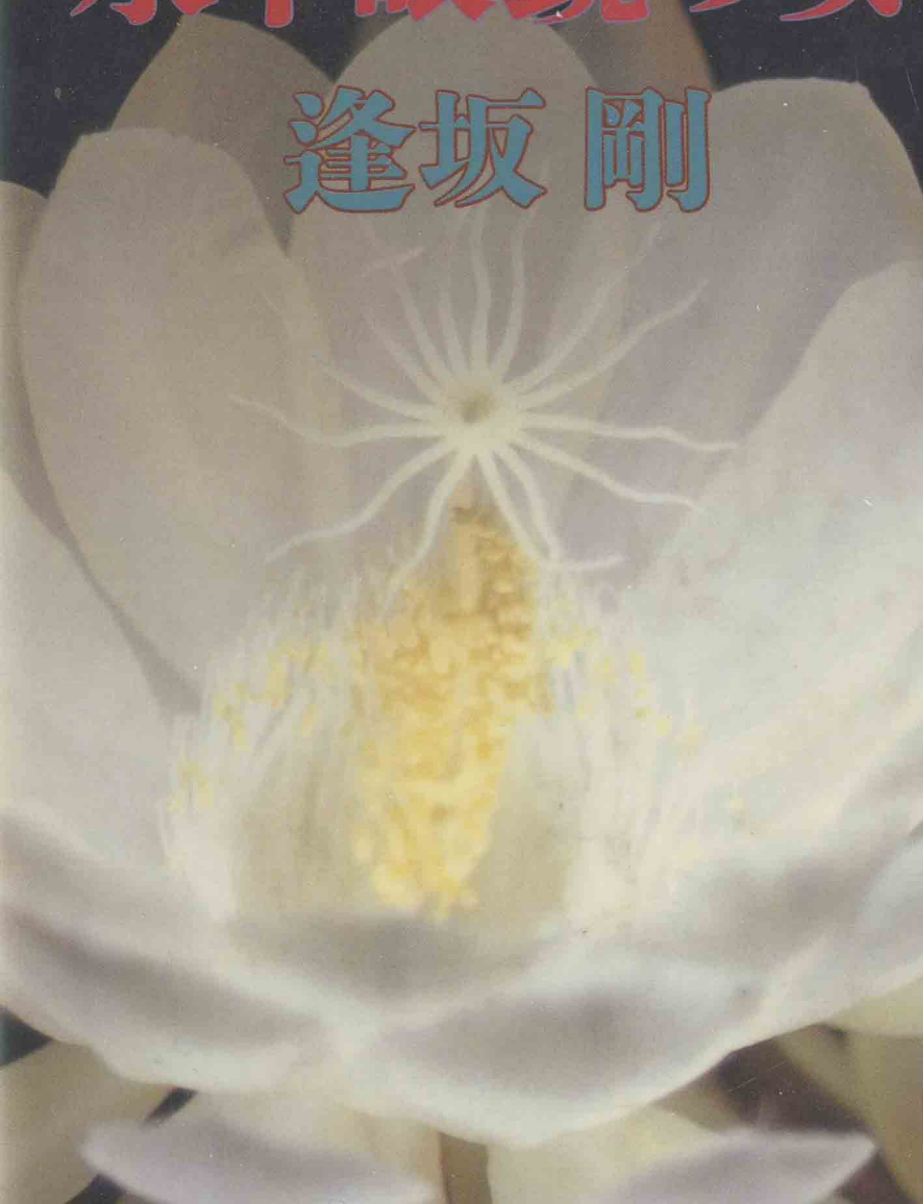


ゴーグル

水中眼鏡の女

逢坂 剛



水中眼鏡の女

逢坂 剛

水中眼鏡の女

昭和六十二年二月二十五日 第一刷

定価 一〇〇円

著者 逢坂 剛

発行者 西 永達 夫

発行所 株式会社 文藝春秋

T 101 東京都千代田区紀尾井町三・二三

印刷 凸版印刷
製本 大田製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

著者紹介

本名・中浩正。昭和18年、東京生れ。中央大学法学部卒。55年、「暗殺者グラナダに死す」でオール讀物推理小説新人賞受賞。62年、「カデイスの赤い星」で第96回直木賞受賞。
主な作品——『百舌の叫ぶ夜』（集英社）、『カデイスの赤い星』（講談社）など。

© Gō Ōsaka 1987

Printed in Japan

ISBN-4-16-309530-6

目次

水中眼鏡ゴールの女 5

ペンテジレアの叫び 117

悪魔の耳 209

装帧
安彦勝博

水^ゴ
中^ル
眼^グ
鏡^ル
の
女

水中^ゴ
眼鏡^グ
の女^ル

1

競泳用の水中眼鏡ゴーグルをかけた女が、格別珍しいというわけではない。しかし門倉かどくら千春は、ここへ泳ぎに来たのではなかった。

たくさんの変わった人間が、この市立病院を出入りする。しかし、水着ならぬ紺のスーツに身を固め、水中眼鏡をかけてやって来る女は、めったにいない。

しかもその水中眼鏡のレンズは、ラッカーか何かで真っ黒に塗りつぶされている。門倉千春は、まるで光のない星から落ちて来た異星人のように見えた。千春の噂が精神科のフロアを走り、医者が入れ替わり立ち替わりのぞきに来るまで、さして時間はかからなかった。

わたしはしかつめらしくカルテに向かいながら、付き添って来た母親の門倉佐和子に尋ねた。
「さて、詳しいいきさつをうかがうことにしましょうか」

佐和子は、細身の体を流行遅れの地味なワンピースに包んだ、五十がらみの女だった。度の強い眼鏡をかけ、いかにも神経質そうにせわしく瞬きまたたをする。

くなった。

数日後、もう一度眼科医を訪れたが、結果は同じだった。千春の目は、眼科的にはまったく問題がなかった。角膜にも虹彩にも異常はなく、視力は正常に働くはずであった。ただまぶたが硬直して、どうしても目をあけることができないのだった。

佐和子はハンカチを出して鼻の脇を押さえた。

「先生がおっしゃいますには、これは精神的なものが原因になっているに違いない。眼科医の手には負えないので、一度精神科で診てもらったらどうかと勧められたのです。それでわたくし、主人とも相談いたしましたして、こちらへうかがったようなわけでございます」

「なるほど、それは適切なアドバイスだったと思いますよ」

「はい。ただわたくしも娘も、こういうところへうかがうのは初めてなものですから、正直申しまして不安で仕方ありませんの」

「お気持ちは分かります。ですが心配はいりませんよ。人間はだれでも、程度の差こそあれ悩みを抱えています。精神科を訪ねてみようと思ひきただけでも、半分は治ったようなものです」

佐和子はほっとしたようにうなずいた。

わたしは千春に目を移した。

千春は見たところ二十七、八歳の、驚くほど美しい体の線の持ち主だった。背は百六十センチそこそこだが、脚が長く、形がいいので、実際よりもずっと長身に見える。胸は高く張り出し、腰も熟れた果物を思わせる豊かなカーブを描いていた。

ただその顔を見ると、首から下の美しさが嘘のように思えた。ふくらみをもった黒い眼鏡が、まるで怪奇映画に出て来る半魚人の目のようにわたしを睨んでいる。髪は眼鏡のバンドで締めつけられ、くしゃくしゃだった。顔色は気味が悪いほど青白く、ぼつぼつと吹き出物ができている。目の周囲は、眼鏡のゴムがしっかり食い込んでいるために、赤黒く変色していた。鼻も唇も、本来の形は悪くないのかもしれないが、異様な眼鏡のためにひどく歪ゆがんで見えた。

千春は膝の上で、ハンカチをもみしだいていた。診察室へはいつてから、一言も口をきかない。「千春さん。あちらで看護婦に、注射を一本打ってもらってください」

千春はいきなり名前を呼ばれ、戸惑ったようだった。これはわたしがいつも初診の際に使う手で、相手の警戒心を緩めるのになにがしかの効果がある。

「あの、なんの注射でしょうか」

千春が聞き返した。固い声だが、教養を感じさせる口調だ。

「ただの精神安定剤ですよ。あなたのいやがる検査は一切しないと約束します。少なくとも今のところはね」

千春は曖昧あいまいにうなずき、黒い眼鏡をわたしに向けた。

「分かりました」

レンズの内側で目が見開かれているかどうか、急に眼鏡をむしり取りたい衝動に駆られる。しかしわたしはさりげなく言った。

「注射が終わったら、寝椅子に横になって休んでいてください」

千春はハンカチを握り締めた。

「眼鏡は取りたくありません」

「構いませんよ、かけたままでもいいです。わたしはお母さんともう少しお話があります。終わったら行きますから、待っていてくださいね。あまり深刻に考えごとをしないようにね」

わたしは看護婦の宮山美雪を呼び入れ、注射の指示をした。美雪はいつもの悪い癖で、千春を好奇心のこもった目でじろじろ品定めした。彼女は精神科にはまったく向いておらず、したがってどの科にも向いていない看護婦だった。その肉感的な体つきから、看護婦の制服を売り物にするソーブランドが似合いかもしれない。

美雪が千春を連れて出て行くと、わたしは佐和子の方に向き直った。

「お嬢さんのことを少しかがいます。独り暮らしということですが、独身ですか」

「はい、現在は」

「とおっしゃいますと、結婚の経験はあるわけですね」

「はい。千春は一人娘なものですから、三年前、あれが二十五のときに、婿養子をとって独立させたのです。ところが昨年、夫をなくしてしまいました、一度わたくしどもの家へもどりました。ところがどうしても自立したいと申しますので、改めてマンションを借りてやった次第でございます」

「ご主人をなくされたといいますと、病気が何かで」

佐和子は目を伏せた。

「いえ、あの、ちょっとした事故で——」

「どんな事故ですか」

佐和子は咎めるようにわたしを見上げた。わたしはできるだけ愛想よく言った。

「別に好奇心でお尋ねしているわけではありません。これに限らず、お嬢さんの病気に関係があるかもしれないことは、全部お尋ねするつもりです。プライベートなことも含めてね。その辺はご理解いただかないと」

佐和子はまた目を伏せた。

「分かりました。千春の夫は、焼死したのです」

「焼死というと、つまりその、焼け死んだとおっしゃるのですか」

「そうです。自宅から火を出しまして、千春はなんとか助かったのですが、夫の方は逃げ遅れてしまいましたの」

「それはお気の毒でした。火事の原因はなんだったんですか」

「よく存じません」

わたしは佐和子の目が、度の強い眼鏡の後ろで、落ち着きなく動くのを見ていた。

「火事の場合、警察や消防署が徹底的に原因を究明するはずですがね」

「警察の話では、石油ストーブの故障による失火だということでした」

「石油ストーブの故障。メーカーに苦情を申し立てましたか」

「は」

佐和子は虚をつかれたように、わたしを見返した。

「故障が製造上のミスによるものなら、メーカーを訴えることもできますからね」

「いいえ、それはいたしませんでした。そんなことをしても、死んだ人間が生き返るわけじゃございせんしね」

わたしはそれ以上追及するのをやめ、話題を変えた。

「お嬢さんのご主人はお勤めだったのですか」

「いえ。夫婦で何人か人を使ひまして、レストランをやっておりました。わたくしの主人が資金を出して、店を持たせてやりましたの。千春は小さいときから料理が好きで、レストランを開くのが夢だったのです」

「するとご主人は、コックさんか何かだったわけですか」

「いいえ、全然。高等学校の教師をしておりましたのを、千春がどうしても結婚して一緒にレストランをやりたいと申しまして。それで学校をやめて、レストランの支配人になったというわけでございます」

「なるほど。——ところで、お二人の夫婦仲はどうだったのですか」

佐和子は窓の外へ目を向けた。花冷えの空が、どんより曇っている。

「子供ができなかったこと以外、特別問題はなかったと思います」

「率直なところ、お二人は仲がよかったのですか、悪かったのですか」

佐和子はちょっと言いよんだ。

「特に仲が悪いということはありません。ただ娘がたまにこぼしておりましたのは、なんでも焼き餅がきつかったと」

「ご主人が嫉妬深かったということですか」

「そう申しております」

「どんな風に」

「それはわたくしの口から申し上げるよりも、娘から直接聞いていただいた方がようございますわ」

わたしはカルテを見下ろし、少し時間をおいた。

「お嬢さんのご主人の嫉妬には、いくらかなりと根拠があったのですか」

佐和子は眉をひそめた。

「それはどういふことでございますか」

「例えばですが、お嬢さんの服装や生活が派手だったとか、男友だちがたくさんいたとか、そういうことはありませんでしたか」

「先生は千春が浮気していたとでもおっしゃるのですか」

「そうは申しません。しかし夫の異常な嫉妬が、かえって妻を浮気に走らせる原因になることがあるものですからね」

佐和子はそろそろ肩を落とした。

「千春に限って、そのようなことは絶対にありませんわ。街で男性とすれ違っただけでも、手を